

東の造瓦ことはじめ

中村 亜希子*

はじめに

世界の瓦は、エーゲ海沿岸発祥の「レルナ・プロセス」と中国内陸部周原発祥の「鳳雛プロセス」の東西二系統に分けられる(大脇 2012)とされるが、本稿は後者における瓦の出現と拡散について扱うものである。中国における瓦の出現と発展に関しては、これまで関野雄(1952)や谷豊信(1984・1994)、劉慶柱(1994)、大脇潔(2002・2012)、申雲艶(2006)、向井佑介(2012)をはじめとする諸氏が、形態や製作技法、紋様や文字の変化、窯の構造といった様々な観点から考察をおこなってきた。平瓦と丸瓦が未分化の段階であった西周前期を経て、西周中期には丸瓦と平瓦が明確に分化、丸瓦の凸面や半円形をした瓦当(半瓦当)面には篋描き等で紋様を施すようになり、その後、瓦当の施紋方法は範による型押しへと変化、秦漢帝国の出現によって、「鳳雛プロセス」の瓦が東アジアの広域に普及するようになるという。

大局的には非常にシンプルな出現と発展のプロセスであるが、商代以前の遺跡・遺構で出土した「瓦」とされる土製建築部材との関係性や、東周時代における各国の造瓦の地域性、統一帝国の出現によって生じた紋様・造瓦技法の斉一化、技術伝達の地域差など、当該時代の政治的・社会的背景を解明する上で重要な課題が、中国の瓦研究の中には依然として多く残されている。しかし、発掘調査に伴う出土資料の急増により、出土遺跡毎の瓦の報告や研究事例は増えたものの、上記のような問題の解決を含む全体的な動向の俯瞰は、より一層困難なものとなっている感が否めない。本稿では、中国における瓦の出現と、主に前漢までの拡散及びその背景について、先学諸氏の研究と筆者のこれまでの研究成果(中村 2007a・2007b・2009・2011a・2011b・2012等)を踏まえ概観し、新たな視点による考察と今後の課題について述べる。

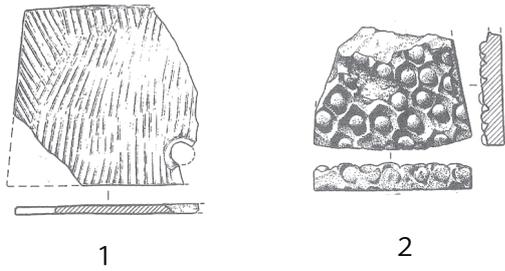
1. 東アジアの瓦の起源

『史記』等の史料では、中国最古の王朝を「夏」と記す。現在の中国では一般的に、夏と商(殷)、西周の三代を初期王朝と認識しており、河南省偃師市に所在する二里头遺跡を夏の遺跡とする研究者も多い。蜀の譙周『古史考』では、夏の時代に昆吾氏が屋瓦を造ったとするが、現時点では二里头遺跡における瓦の出土は報告されていない。

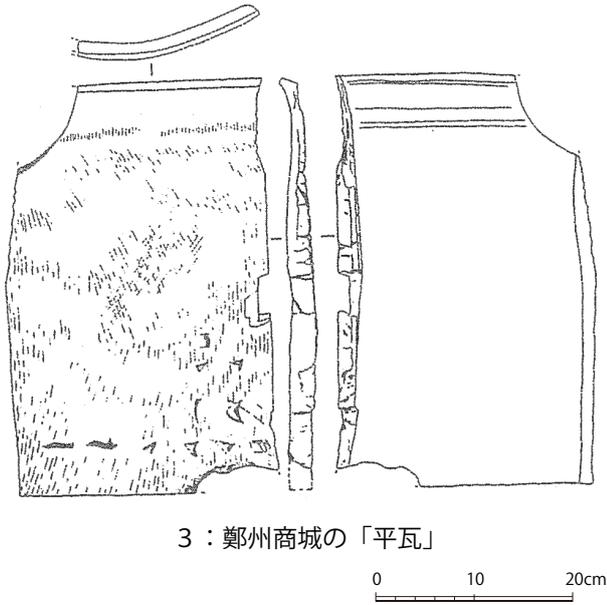
系統的な変化を辿ることができる最古の瓦は、陝西省宝鸡市岐山県鳳雛村で発見された平瓦状の瓦であり(陝西周原考古隊 1979)、中国の瓦の起源は西周時代のはじめ、紀元前 11 世紀頃とするのが通説である。しかし、2000 年以降になると、商代前期の都とされる河南省の鄭州商城でも、出土品の中に平瓦状の土製品が含まれていることが報告されるようになった(河南省文物考古研究所 2007)(図 1-3)。周原出土の平瓦との連続性を認めれば、瓦の初現は二里岡上層 1 期まで遡ることとなる。

なお、先学諸氏が指摘するように、古い時代の中国の瓦は、叩き板と当て具を用いて粘土円筒を成形し(以下、「叩き板当て具技法」と呼称)、それを分割・焼成して製作されており、分割前の瓦円筒の形態・製作技法は、土製の水道管のそれとほぼ同じである。土製の水道管は新石器時代後期の平糧台遺跡(河南省淮陽県)で出土したものが知られており(曹 1991)、紀元前 2000 年紀に入る以前に、瓦を製作する技術的な基礎はほぼ完成していたといえる。一方で、同じく新石器時代後期の陶寺遺跡(山西省襄汾県)でも、「瓦」とされる板状の土製品(図 1-1・2)が多数出土している(中国社会科学院考古研究所山西隊ほか 2005)。これらは湾曲しない平らな板状の土製品であり、円筒を分割して成形した瓦とは特徴を異にする。陶寺遺跡出土の板状土製品が屋根材として用いられた瓦だとすれば、中国における瓦の初現は紀元前 3000 年紀に遡ることとなり、奇しくもエーゲ海沿岸

* 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所



1・2：陶寺遺跡の「平瓦」



3：鄭州商城の「平瓦」

図1 商代以前の土製建築部材

(1・2：中国社会科学院考古研究所山西隊ほか2005(337頁)掲載の図36-1・同14を引用、3：河南省文物考古研究所2007(33頁)掲載の図2-2を引用)

発祥とされる西の「レルナ・プロセス」(大脇2012)の瓦の出現と近い時期になり得る。陶寺遺跡を伝説の王朝「堯」の都と推測する研究者もおり、なぜ、陶寺遺跡に「鳳雛プロセス」とは系統を異にする「瓦」¹⁾が用いられたのかも含め、再検討する必要がある。

2. 周の瓦と秦の瓦

中国における瓦の拡散を考えるにあたり、重要な鍵となるのは、西周の瓦と秦の瓦である。以下では、それぞれの変遷について簡単に紹介する。

1) 西周の瓦

西周の瓦は岐山県鳳雛村における1976年の調査(陝西周原考古隊1979)以降、陝西省西部一帯の「周原」と称される地域で多く出土している。特に、扶風県召陳村の宮殿建築址では建て替えの痕跡が確認されており、上層と下層の各建築址で出土した瓦の分析によって、西周瓦の時期的な変遷が明らかにされた(羅1987)。これ

によると、下層建築に代表される西周前期の瓦はすべて平瓦状であり、製作技法は土製水道管と同様、粘土紐を積み上げ(もしくは巻き上げて)、叩き板当て具技法によって粘土円筒を成形し、柔らかいうちに分割、焼成前に補足として側面や端面にも叩きをおこなっている。瓦を屋根に固定するために、端部付近に穴を穿ったり、凹凸面に突起や半環状の把手を取り付けたりする例が多いのが、この時期の瓦の特徴である。

一方、上層建築出土瓦の大半は西周中期のものと考えられるが、丸瓦と平瓦が明確に区別され(図2-1~4)、半円形の瓦当(半瓦当)を付す軒丸瓦が出現する。半瓦当(図2-5~8)には、青銅器等に認められるような鱗状の紋様を篋描きで施すものもある。丸瓦は円筒を二分割した形態であり、端部には玉縁様の低い段が設けられる。凸面は縄紋上に篋描きや擦り消しをおこなうことで雷紋などを施紋する例もある(図2-3)。瓦筒部の凹凸面における突起や把手は、西周中期までは比較的多く認められるという。

西周後期の瓦は、扶風県雲塘村及び齊鎮村で発見された宗廟遺跡で出土する(周原考古隊2002)。中期の瓦から大きな変化はないが、厚みが薄く・縄紋が細くなり、規格の統一化が認められる以外に、固定のための突起が減少し、施す紋様が多様化、玉縁が明瞭化するなどの特徴が指摘されている(向井2012)。なお、雲塘・齊鎮の宗廟遺跡では、門址などにのみ瓦を用い、中心的な建物には用いていないという。克殷以前に造営を開始したとされる岐山県鳳雛村の宗廟遺跡では、大棟や隅棟のみを瓦で葺いたと考えられており(傅1981a・b)、時期差はあるものの、西周時代における瓦は「宮殿を飾る華美な建築部材」という性格が強かったと考えられる。

西周時代の瓦は、周原地域のほか、豊京・鎬京の置かれた陝西省長安県一帯や山東省の曲阜魯城等ごく限られた地域・遺跡でしか出土しない。しかし、西周中期に確立された、叩き板当て具技法で成形した円筒を分割する丸瓦と平瓦、半瓦当を丸瓦先端に接合した軒丸瓦という組み合わせが、東周時代以降の中国各地で出現する瓦の原型となったことは疑いない。

2) 秦の瓦

西周の瓦以外に、後の中国各地の造瓦に極めて大きな影響を与えたのが、秦(紀元前778-紀元前206年)の瓦である。紀元前771年に周が東遷して以降、東周も含め、各国での造瓦活動は必ずしも活発ではなかった。洛陽東遷後の周の瓦は、遺跡の立地条件などにより、その変遷が明らかになっていないが、一方で、秦の瓦は陝西省宝鶏市鳳翔県の秦公大墓や、雍城(紀元前677-紀元

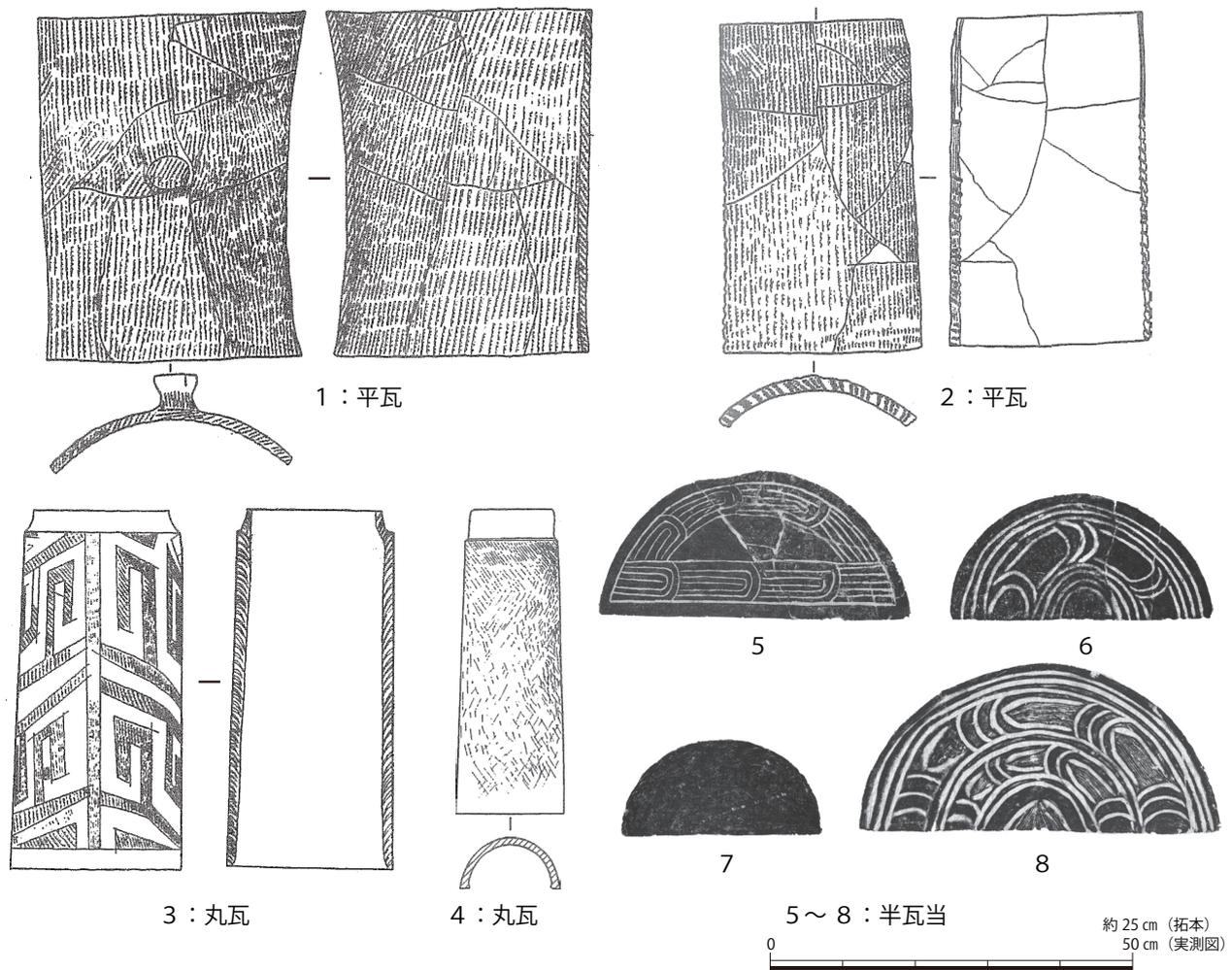


図2 西周中・後期の瓦

(1～4: 周原考古隊2002 (21頁) 掲載の図19-13、3、12、6を引用、5～8: 王2004掲載の図9 (10頁)、図8・図7 (9頁)、図11 (11頁) を引用)

前383年)、紀元前350年に遷都した陝西省咸陽市所在の咸陽宮といった春秋・戦国時代の大墓や首都の遺跡で大量に出土しているため、ある程度連続的な変化が検討できる。さらに、雍城内の豆腐村では2005～2006年にかけて瓦磚を生産した大規模な工房の遺跡が発見され、土製の瓦当範(図3-9～13)を含む大量の瓦磚が出土・報告された(陝西省考古研究院2011・陝西省考古研究院ほか2013)。

秦が瓦を用いるようになったのは、雍城に遷都した春秋中期以降であり、使用した瓦は、断面凹字形の平瓦(図3-1)と有段式(図3-2)もしくは無段式の丸瓦、半瓦当のつく軒丸瓦(図3-2・3)、棟に用いた大型丸瓦と考えられる(中村2011b)。春秋時代の秦の瓦が出土した遺跡は、西周の遺跡が多く存在する陝西省宝鸡市鳳翔県一帯にあり、瓦の凸面や瓦当面に叩きによる縄紋や、篋描きや撫でで施紋するなど、西周の瓦との共通点が認められるため、一般的に、春秋秦の瓦は西周の伝統と経験を継承した(飯島1982)と表現されることが多い。一方、

西周の平瓦が瓦円筒を分割した断面弧形の瓦であるのに対し、春秋時代の秦の平瓦は断面凹字形であり、形態が異なる。この差異について向井佑介(2012)は、「この時期の秦の瓦がまだ試行錯誤の段階であったことに由来する」とするが、一方で、坪井清足(1989)や国慶華ら(国ほか2013)のように、西周の瓦や春秋秦の瓦の類例が、エーゲ海沿岸地域に存在することを指摘し、東西世界の造瓦の繋がりを示唆する研究者もいる。

さて、雍城には約280年間という長期にわたって秦の都が置かれたが、雍城遺跡内外の各遺構から出土した瓦の傾向を分析することによって、その変遷を復元することができる(中村2011b)。春秋時代の秦で用いられた半瓦当付き軒丸瓦と断面凹字形の平瓦の組み合わせは、およそ戦国時代前期(紀元前5世紀)頃になると、範を用いた有紋円瓦当と西周のような断面弧形の平瓦の使用へと変化することが窺われる²⁾。丸瓦と平瓦の形状のみ注目すると、試行錯誤を経て西周のような平瓦を製作できるようになったとも考えられるが、ここで注目すべ

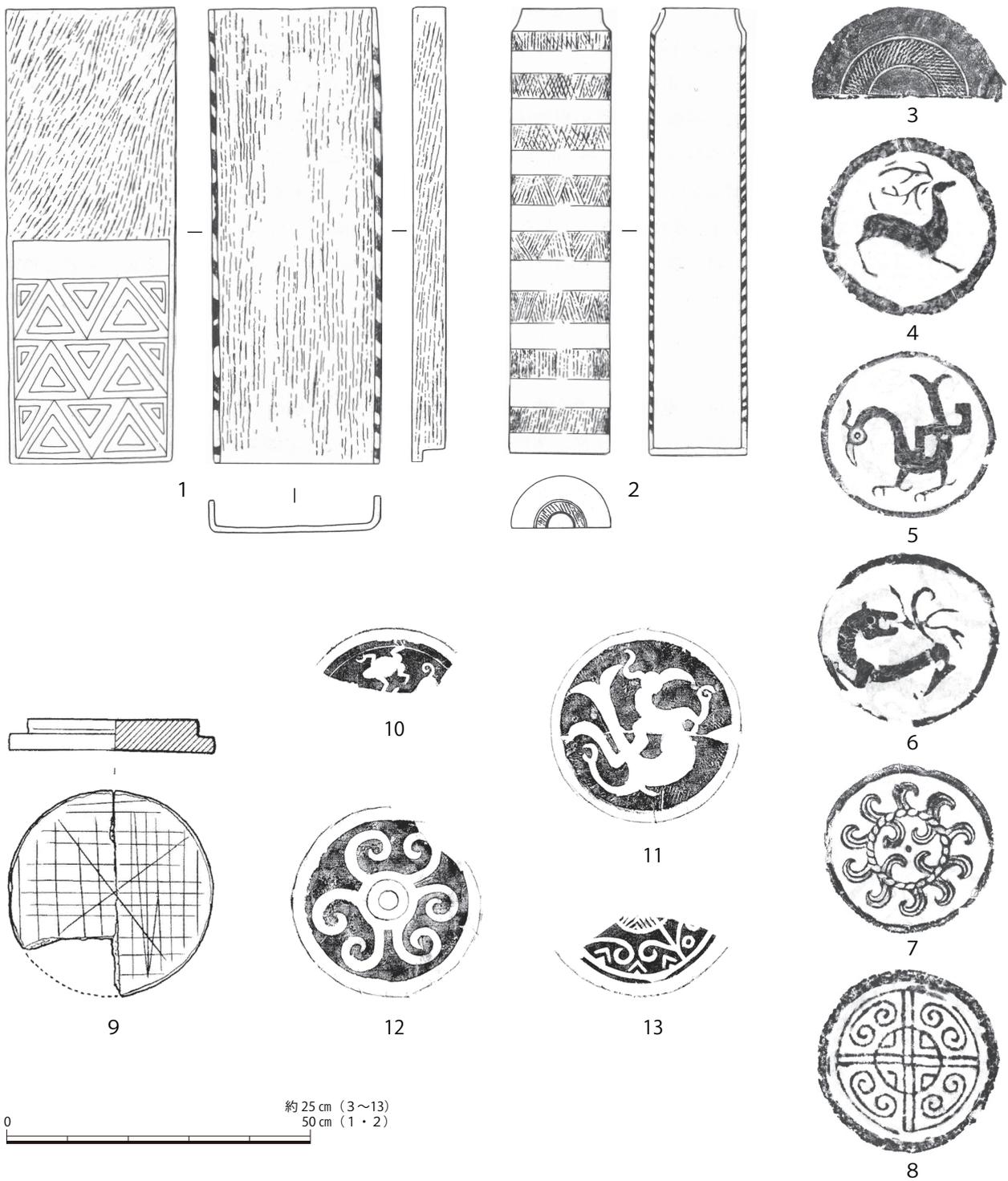


図3 東周時代の秦の瓦と瓦当範

(1・2: 陝西省雍城考古隊 1985 b (19 頁) 掲載の図 15-1・8 を引用、3～8: 王 2004 掲載の図 12 (19 頁)、図 16 (22 頁)、図 23 (26 頁)、図 36 (32 頁)、図 98 (71 頁)、図 120 (81 頁) を引用、9～13: 陝西省考古研究院 2013 (222 頁) 掲載の図 168-5・6・1・2・4 を引用
 *詳細については同報告書掲載のカラー写真(彩版) 96-5・6 及び同 97-2～6 を参照)

きなのは、西周では未確認である瓦当範を用いて施紋した瓦当、それも円瓦当が出現するという点である。

統一以前の秦の瓦当の内、鹿や鳥、虎などの紋様を施した動物紋の円瓦当(図 3-4～6)は紀元前 350 年に遷都した咸陽以降の遺跡ではほとんど出土しないため、秦

の円瓦当の中では最も古手であると考えられる。雍城内の遺構群のうち、県城の南に接する地区ではこの手の瓦当が出土瓦当の 7 割以上を占める。ここは戦国秦の宮殿の所在地と目されているが(陝西省雍城考古隊 1985a)、創建瓦は動物紋の円瓦当なのだろう。一方、咸陽の宮殿

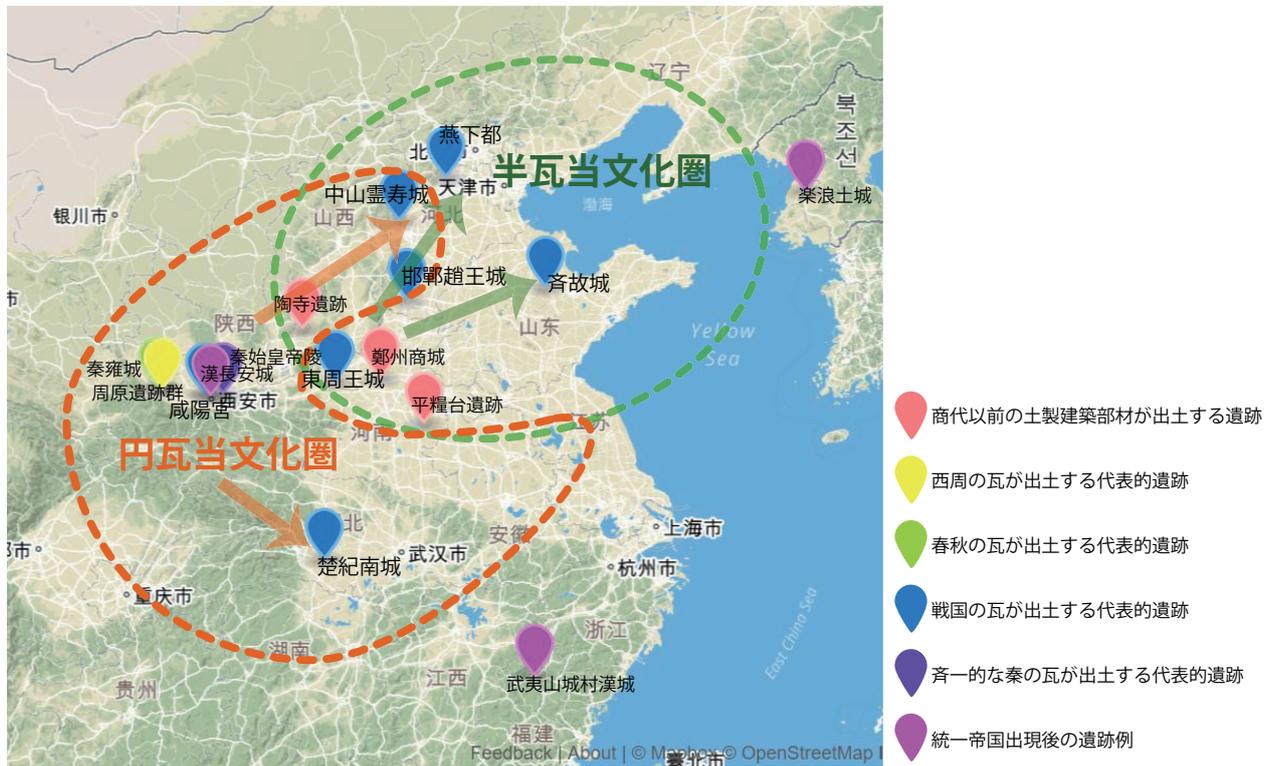


図4 半瓦当文化圏と円瓦当文化圏の概念図

(背景図に Mapbox 及び OpenStreetMap を使用し GeoJson. io で作成した地図をもとに作成)

では、変形の少ない整った葵紋の瓦当(図3-7)が出土しており、遷都の際に瓦当紋様が一新されたと考えられる。なお、咸陽宮のうち大規模な発掘調査が行われた1～3号宮殿建築遺跡で出土する瓦当の大多数は、瓦当面を四分割し雲紋を配した雲紋瓦当(図3-8)であるが、四分割した雲紋は洛陽の東周王城出土の半瓦当に多く認められることから(中国科学院考古研究所1959)、紀元前256年に秦が東周を滅ぼした後に取り入れた紋様と考える(中村2011a)。秦の瓦当紋様に東周の瓦当紋様の要素を取り入れた理由には、秦が王朝の正当性を誇示するという目的があったのかもしれない。

このように、秦は、西周の造瓦技術を継承して春秋中期に造瓦を開始したと考えられるが、同時に、なぜか、その当初はエーゲ海沿岸世界と共通点が認められる特殊な平瓦を採用した。戦国前期頃には新たに範を用いて円形の瓦当面全体に動物紋等の施紋をはじめ、紀元前350年の咸陽への遷都を機に新しい紋様として葵紋を、東周を滅ぼしたことを機に東周の瓦当紋様である四分割の雲紋を取り入れるなど、積極的かつ前衛的な造瓦活動を行ってきた。秦の統一以降、全国各地で急速に拡散する瓦は、西周以来の半瓦当を用い続けた東周や燕、齊など東方諸国の造瓦よりも、秦の影響を色濃く受けている。

3. 東周時代の各国の瓦 - 半瓦当文化圏と円瓦当文化圏 -

春秋時代は、西周の造瓦の影響を受け、晋をはじめとする大国で造瓦が行われていた。しかし、その内容をみると、叩き板当て具技法によって成形された丸瓦・平瓦以外に、無紋半瓦当がついた軒丸瓦などが若干報告されているのみであり、その明確な時期の特定が非常に困難な状況にある。いっぽう、各国が独自色の強い瓦当紋様を創出し始めるのは、戦国時代も後期の紀元前4世紀以降のことと考えられる。瓦当紋様の代表例としては、東周の雲紋、燕の饕餮紋や山形紋、齊の樹木紋等が挙げられる(図5)。いずれも東方に位置する国の瓦であるが、これらの瓦当は基本的にほぼすべて西周由来の半瓦当の形態をとるという共通点がある。以下では、戦国各国の瓦について、半瓦当を主体的に用いた「半瓦当文化圏」(関野1952)に対して、円瓦当を主体的に用いた「円瓦当文化圏」(中村2012)を分け、出土瓦当について紹介する(図4)。

1) 半瓦当文化圏

東周の瓦は、周が紀元前770年に東遷した都、洛陽の地で出土する。洛陽の東周王城は現在の河南省洛陽市の市街地に位置するが、漢代には河南县城が置かれるなど重複関係が複雑である。出土遺物も漢代のものが多く、確実に東周まで遡ると判断できる瓦が出土する遺跡・遺構は、かつて、河南县城址の中央に道路(中州路)を

通した際に検出した土坑をはじめ、少数である（中国科学院考古研究所 1959）。戦国時代の軒丸瓦は春秋時代の無紋半瓦当同様、半瓦当のみであるが、無紋半瓦当以外に、箆を用いて施紋したものが出現する（図 5-3～7）³⁾。円形の瓦当箆で粘土円盤に施紋し、丸瓦円筒と接合後に二つに分割することによって、2 個体の半瓦当付き軒丸瓦を生産できるようになっており、紋様は「饕餮紋」が徐々に簡略化されて、最終的に雲紋になるという。東周の瓦で特筆すべきは、戦国後期の軒丸瓦の中に、叩き板当て具技法ではなく、模骨技法で成形された瓦が存在することである。模骨技法は、後述するように前漢中期以降、中国国内の広域で主流となる瓦円筒の製作技法であるが、この洛陽中州路での報告が、現在確認されている中で最も古い模骨技法による瓦の出土例であるといえる。

河北省北部から遼寧省一带を中心に広大な領土を有した東の大国である燕の瓦は、燕昭王の時期以降に副都として造営が開始されたという燕下都の遺跡（河北省易県）で大量に出土する。戦国時代の各国の遺跡では、出土瓦当の大半を無紋のものが占める例が多い中、燕下都では、圧倒的大多數を紋様のある半瓦当が占める。瓦当紋様の編年は、饕餮紋瓦当の出現を春秋前期にまで遡るとする説（劉・呉 2004）をはじめ諸説あるが、谷豊信（2006）は、双獣饕餮紋及び巻雲饕餮紋の半瓦当が、戦国末までの約 500 年間、大きな変化なく存続したことが不自然である点を指摘し、双獣饕餮紋半瓦当の年代を、燕下都 16 号墓出土の壺にあしらわれた鋪首の紋様との類似性から、紀元前 4 世紀末頃であると推測した。なお、燕では、饕餮紋が簡略化することによって山形紋（図 5-15）になることが察せられるが、出土層位からも、饕餮紋に比べ山形紋半瓦当が後出することが察せられる（河北省文物研究所 1996）。また、燕の半瓦当の大半が篋切り切断なのに対し、山形紋半瓦当には糸切りによる切断の痕跡が認められるため、燕では瓦当の切断方法が篋切りから糸切りへと変化することが指摘されている（谷 2006）。このほか、燕の遺跡では比較的小型の半瓦当の中に双龍紋（図 5-14）等の紋様が認められるが、このような紋様の瓦当は、遼東半島等でも認められ、戦国時代の燕の領域を示す根拠のひとつとなっている（中村 2007b）。

戦国時代には西の秦と並ぶ東の大国であった齊の都の遺跡は山東省淄博市に位置し、大量の無紋半瓦当以外に、樹木紋などを施紋した半瓦当（図 5-8～11）が大城東北部の台地上で多数出土した（中村 2007a）。早くは関野雄（1952）が指摘したように、齊の樹木紋瓦当には、紋様が抽象化・簡略化されたものの中に、燕に特徴

的な瓦当紋様である饕餮紋の要素が認められるもの（図 5-10・11 等）がある。相対的に新しい樹木紋では、枝の先端などが巻くといった特徴が認められ、雲紋を連想させる（中村 2007a）。なお、紋様の区画線としての圈線は存在するものの、外縁が平坦で明確な高まりを持たない等といった特徴は、東周も含め、半瓦当文化圏の瓦当の多くにも認められる特徴である。半瓦当下端面の切断は、篋切りするもの（図 5-8～10）と糸切りするもの（図 5-11）が存在する。

2) 円瓦当文化圏

東の大国が戦国時代には主に半瓦当のみを用いたのに対し、内陸に拠点を置く国々では、円瓦当を用いた傾向がある。円瓦当の初出が戦国前期頃の秦であると考えられることは前述したが、秦と近い位置関係にあった三晋地域や楚の遺跡では半瓦当とともに円瓦当が多く出土しており、造瓦に秦の影響が強く窺える。

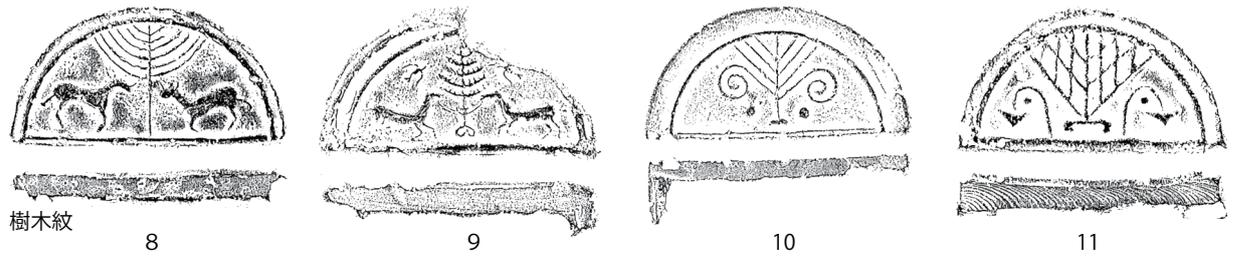
例えば、楚の郢都とされる湖北省荆州市の紀南城遺跡では、春秋後期から戦国時代とされる無紋の半瓦当・円瓦当をはじめとする瓦の出土が報告されており（湖北省博物館 1982a・b）、その南東約 50 km に位置する湖北省潜江市でも、楚の靈王が建てた章華台と考えられる龍灣遺跡で瓦の出土が報告されている。向井（2012）によると、龍灣遺跡では、春秋中期には円瓦当が存在せず無紋半瓦当のみが出土するが、戦国中期の層で出土する瓦当には円瓦当が多く、半瓦当は少数になるという。なお、楚の遺跡から出土する瓦当は基本的にほぼすべて無紋である。戦国後期の楚の都である寿春故城（安徽省淮南市）では、ごく少数のみ有紋瓦当の出土が報告されるが、齊など隣接諸国の影響を受けて作り出されたものであることが劉慶柱（1994）によって指摘されている。

他にも、中山国の靈寿城（河北省石家荘市）や邯鄲趙王城（河北省邯鄲市）などでは、戦国時代に無紋・有紋の半瓦当及び円瓦当の両方を用いていたことが知られている。前者の主流は半瓦当であり、無紋半瓦当が出土最多を占めるが、乳釘陰雲紋のように半瓦当と円瓦当とで同じ題材をモチーフにしながらも、瓦当箆を共有せず、半瓦当には半瓦当用の箆、円瓦当には円瓦当用の箆が用いられていた例が報告されており（図 5-18・20）、興味深い（河北省文物研究所 2005）。いっぽう、邯鄲趙王城では、半瓦当に比べて円瓦当の出土量が多いという（東亜考古学会 1954）。半瓦当はすべて、円瓦当も大半が無紋であり（図 5-21・22）、瓦当箆による紋様を施した例は走獣紋円瓦当（図 5-24）をはじめ、極めて少ない。なお、邯鄲趙王城出土の円瓦当には縄蓆紋（図 5-23）、中山靈寿城では網代紋（図 5-16）の半瓦当が出土する。紋様

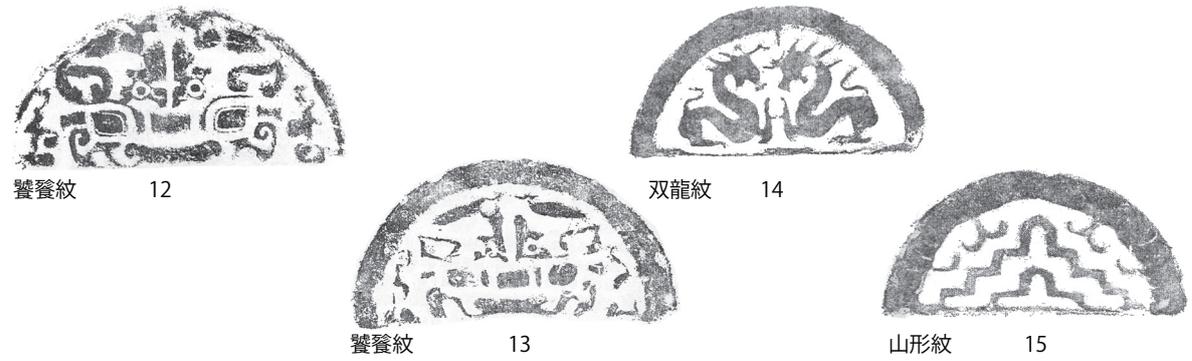
東周



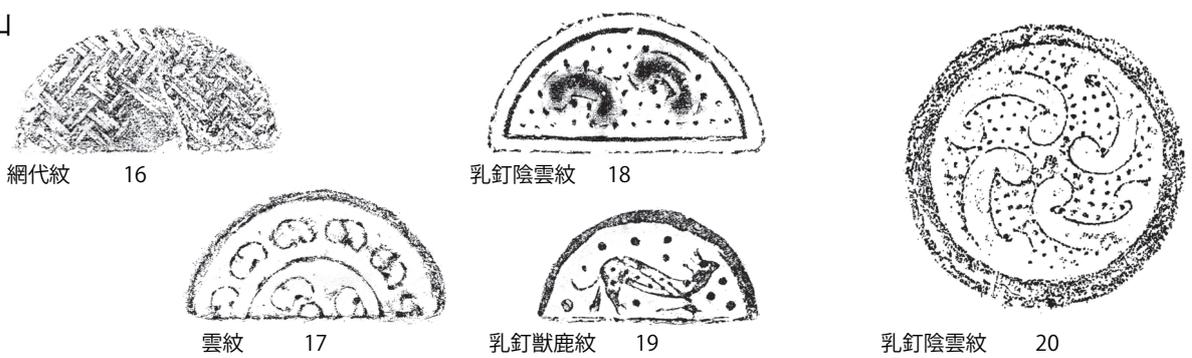
齊



燕



中山



趙

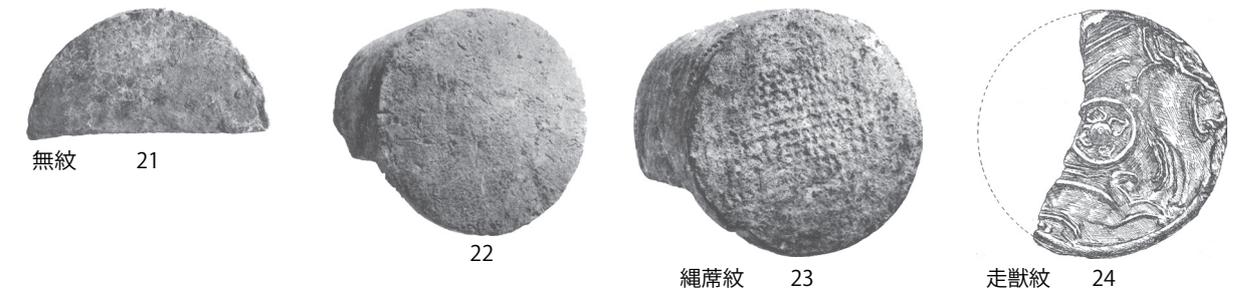


図5 東周時代各国の主要な瓦 (縮尺: 約 1/4)

(1～6: 中国科学院考古研究所 1959 掲載の図版 17-1、図版 18-15・14、図版 17-3・12、図版 18-8・12 を引用、8～11: 中村 2007a 掲載の図 3-2・4・5・8 (103 頁) を引用、12～15: 河北省文物研究所 1996 掲載の図 424-1 (739 頁)、図 152-1 (256 頁)、図 153-1・2 (257 頁) を引用、16～20: 河北省文物考古研究所 2005 掲載の図 33-7・5・2 (50 頁)、図 34-1 (51 頁)、図 32-2 (49 頁) を引用、21～24: 東亜考古学会 1954 掲載の図版 11-3・2・1 と挿図 8 (60 頁) を引用)

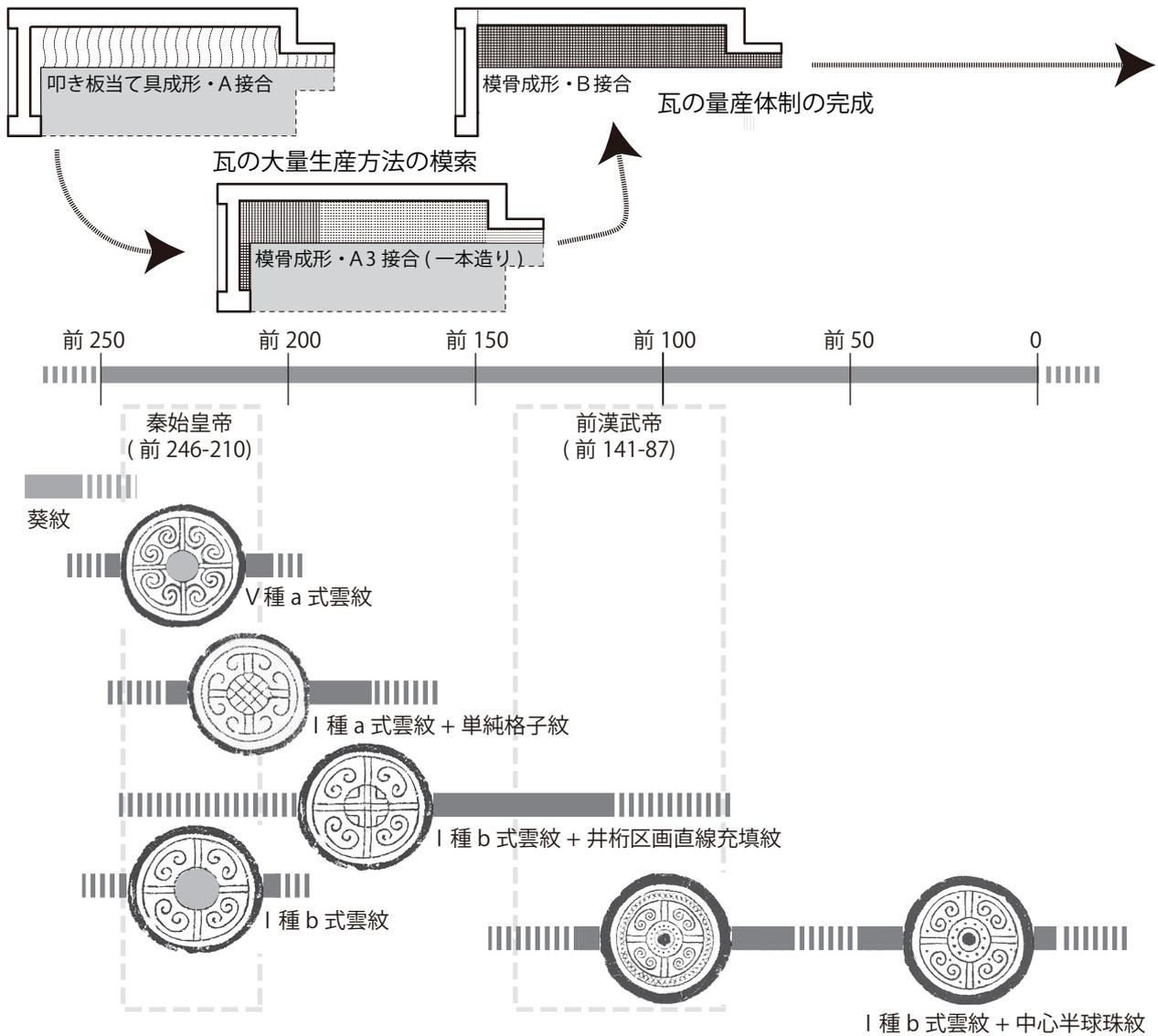


図6 統一帝国の雲紋と造瓦技法の変遷（西安付近）

（中村 2011a の図 8（58 頁）をもとに作成 * 拓本は陝西省考古研究所 2004 掲載の図 215-2（239 頁）、図 409-6（501 頁）、中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所 2007 掲載の図 78-4（111 頁）、図 74-4（106 頁）、図 75-5（107 頁）を引用）

としてみることも可能ではあるが、これらは、無紋の瓦当範から生乾きの瓦当円盤を取り外しやすくするために敷かれた蓆や網代の痕跡であろう。無紋瓦当の製作時期は西周中期から漢代以降までと非常に長いが、時期・地域によって、効率よく瓦を製作するために様々な工夫が施されたことが窺われる。

4. 統一帝国の出現と瓦の斉一化

各地の瓦当紋様の斉一化には統一帝国の出現が大きく関係する。戦国時代後期の秦都咸陽では、おそらく紀元前 256 年に東周を滅ぼしたことを契機として、瓦当の紋様に東周風の四区画の雲紋を採用しはじめた。また、東周にしか存在しなかった型で丸瓦筒部を成形する模骨技法も、この時期に秦にもたらされたと考えられる（中村

2011a）。秦は各国を亡ぼすと、その瓦工を集めて始皇帝陵等の造営にあたらせたため、魚池遺跡（秦始皇帝陵俑坑考古発掘隊 1983）など始皇帝陵周辺の遺跡で出土する瓦には、図 5-9 や 11、15 に類似する齊の樹木紋や燕の山形紋といった、各国の紋様の瓦が認められる。

紀元前 221 年に統一帝国となった秦は、大規模な宮殿や陵墓の建設をおこなったため、瓦の需要が急増した。一方で、咸陽宮の造営から始皇帝陵の造営にかけては瓦当紋様のバリエーションが激減しており、この傾向は続く前漢時代にはさらに顕著になる（中村 2011a）。かつて独自色の強い半瓦当を生産・使用していた東方諸国の遺跡でも、帝国中央で出土するような雲紋瓦当が散見されるようになる。秦による初の統一王朝は短命に終わったが、秦の造瓦体制は前漢王朝に引き継がれる。長安城

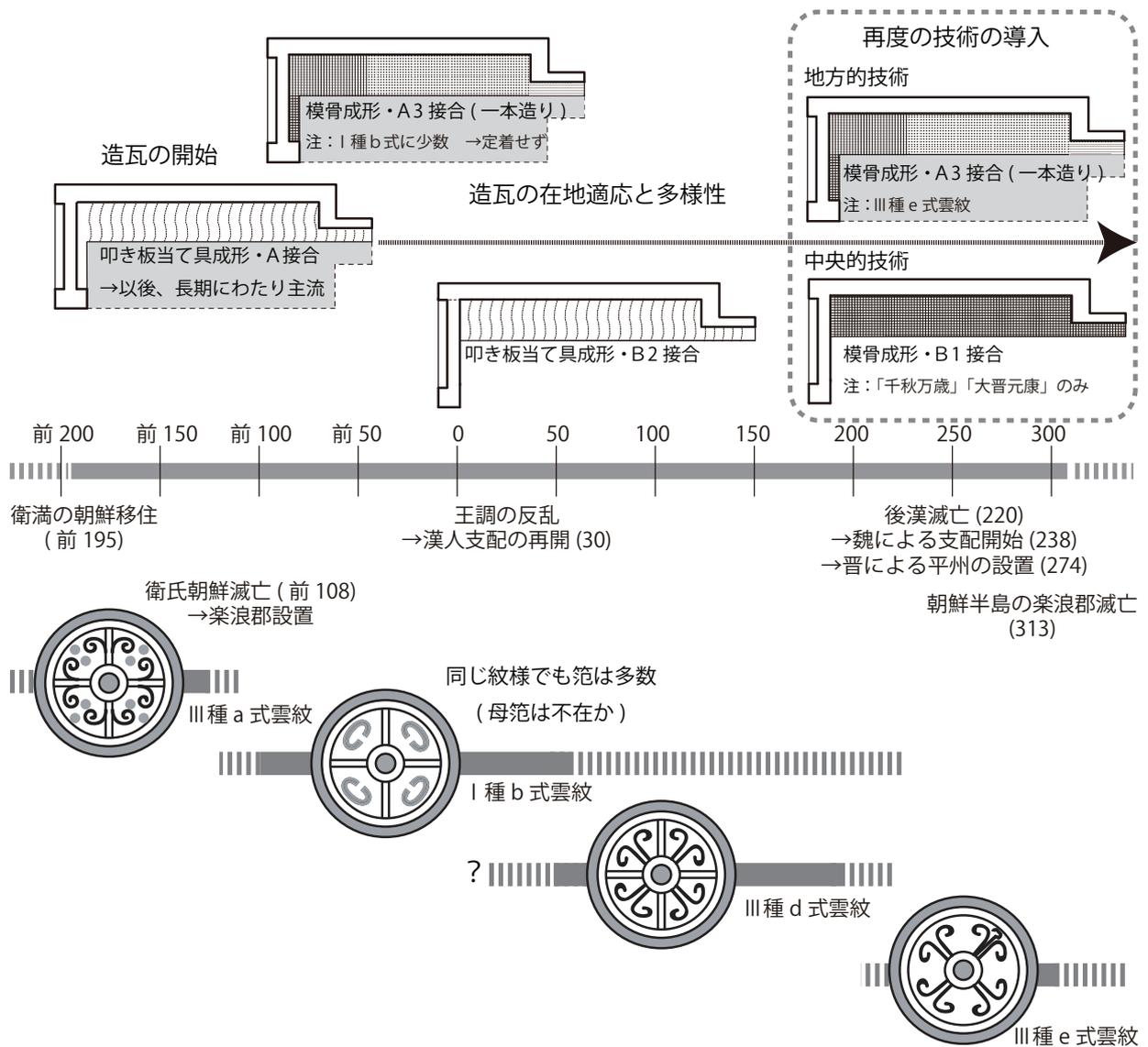


図7 帝国境域の雲紋と造瓦技法の変遷（楽浪土城）
（中村 2012 の図7（101頁）を参考に作成）

の造営にあたっては、当初は秦の瓦当と同じ紋様の瓦を使用しており、造営が進むにともない、瓦当紋様の種類はさらに厳選され、前漢中期の武帝の治世には、前漢独自の瓦当紋様が定着する。製作技法も、戦国時代までは基本的に叩き板当て具技法で瓦円筒を成形し、不要な部分を切除する技法がほとんどであったが、洛陽に存在した模骨技法が西安周辺に伝えられ、試行錯誤を経て確立し、定着するのも同じ時期である（図6）。前漢前期の間に、造瓦工人集団の再編成がおこなわれたのであろう。

戦国時代の半瓦当文化圏に位置した都市でも、統一秦から前漢前期にかけては、半瓦当以外にも、半瓦当用の瓦当範を用いて円瓦当の軒丸瓦を製作したことが、斉故城の瓦の出土状況から窺われるが、やはり前漢中期頃を境に紋様に斉一性が認められるようになり、円瓦当用の

新たな範で同紋の円瓦当を量産するようになったことが窺える。同時に、瓦円筒の製作技法も、叩き板当て具技法が模骨技法によって淘汰され、半截後の丸瓦を瓦当裏面に接合するといった、より効率的な造瓦技術が普及していった（中村 2007a）。

5. 秦漢帝国境域における造瓦

秦漢帝国の出現によって、瓦は、朝鮮半島北部やベトナム北部など、従来は造瓦をおこなわなかった地域へも普及するようになった。しかし、中国戦国時代までに造瓦を開始した地域とは異なり、造瓦の技術は中央からではなく、周辺地域から瓦工が派遣されることによって伝えられ、在地の土器工人が造瓦活動に携わったと考えられる。東の境域である朝鮮半島北部の平壤に所在する楽

浪土城では、前漢頃に、叩き板当て具技法で軒丸瓦の円筒部分を成形し、不要な部分を切り取るA接合の造瓦技法がもたらされ、武帝によって楽浪郡が設置された際には、試行錯誤段階の模骨技法の成形技法がもたらされた(図7)。西安に比べ技法に若干時間的な遅れが認められ、瓦当の雲紋も遼寧省の姜女石遺跡や山東省の曲阜に類例が見い出せるため、楽浪の造瓦は西安周辺からではなく、これら近隣地域からもたらされたと考えられる(中村2012)。

なお、秦漢帝国の出現以降初めて造瓦を開始した地域では、造瓦に在地の土器工人が大きく関与していたためか、中原とは異なる技術的変遷を遂げることが認められる。楽浪土城でも、前漢中期に模骨技法がもたらされたにも関わらず、技術は定着しなかった。逆に、土器の製作技法に近い叩き板当て具技法が長期にわたって存続し、図7の「叩き板当て具成形・B2接合」といった他の地域には認められない技法が出現するなど、独自の変化を遂げている。このような技術の逆戻り現象は、楽浪土城以外にも、帝国境域ではしばしば起こるようであり、ベトナム中部に位置し林邑の都に比定されるチャキウ遺跡では、模骨技法の瓦に対し、叩き板当て具技法の瓦が新しいことが、発掘調査によって層位的に確認されている(山形1998等)。

6. 再度、東アジアの瓦を考える

以上では、東アジアにおける瓦の出現と拡散について、主に前漢時代までを対象としてその概略を述べた。以下では、これらの点を踏まえた上で、現時点における筆者の考えを述べる(図8)。

まず、世界の造瓦について、エーゲ海沿岸と中国周原を瓦の二大発祥地と認識する傾向があるが、戦国時代前期までの中国の瓦については、一元的な発祥・発展という枠組みで捉えることが難しく、むしろ他の地域における造瓦との関係性を精査する必要があると考える。「鳳翔プロセス」の名が示す様に、これまで中国の瓦の起源として西周の瓦が極めて重視されてきたが、初現期の秦の平瓦が西の世界の瓦にも認められるような断面凹形の平瓦だった点や、秦によってはじめて瓦当の施紋に瓦当範が使用されるようになり、瓦当の形態が円形になったことは、東アジアの造瓦史上極めて重要な点であるといえる。地中海沿岸の「レルナ・プロセス」起源の西の瓦と春秋時代の秦の瓦に直接的な関係が認められるかは別としても、筆者は東の瓦の起源も決して一元的なものではなかったと考える。

また、秦によってもたらされた変化の中でも、瓦当範

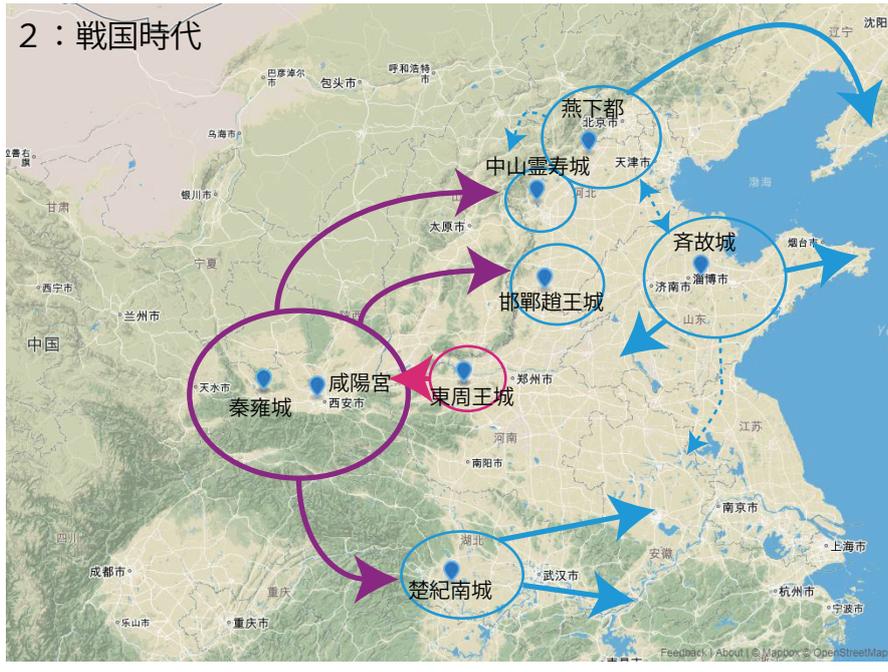
の出現は、視覚に訴える特徴的・効果的な紋様の瓦当を量産するにあたり、極めて大きな画期となった。戦国時代に周や燕、齊をはじめとする諸国が独自色の強い瓦当を生産するようになった背景に、瓦当範の使用は不可欠であるが、瓦当の施紋に範を使用するという発想自体は何かしらの形で共有された可能性が高いだろう。また、紋様で主張された各国の独自性は、例えば、齊の樹木紋半瓦当に燕の饕餮紋半瓦当の紋様要素が見いだせる点や(関野1952)、燕国に特徴的な山形紋の瓦当が斉故城や秦の始皇帝陵付近といった異質な場所で出土するという事象に遭遇した際、その歴史的背景を考える上で貴重な材料となる。戦国時代の各国の瓦の編年を、同紋や同範という視点を踏まえた上でおこなうことは、東の造瓦史を研究する上で喫緊の課題の一つであると考えられる。

秦によって達成された天下の統一は、各地で出土する瓦当紋様にも如実に表れる。度量衡や文字の統一を進めた始皇帝は、屋根に葺く瓦当紋様の統一も目指したようであり、始皇帝陵で出土するような雲紋の瓦当が、中国各地で出土するようになった。秦による統一王朝は短命に終わったが、続く前漢王朝も造瓦については基本的には同じ路線を引き継いだ。戦国時代後期までの各国・各地域は、西周以来の伝統を引き継ぐ半瓦当文化圏と、秦の影響が色濃い円瓦当文化圏に分けられ、それぞれ紋様の独自性も強かったが、統一秦を経て前漢時代になると、徐々に半瓦当は淘汰され、円瓦当が軒丸瓦の瓦当の主流になっていく。齊のような半瓦当文化圏で円瓦当が普及する過程では、当初、樹木紋等半瓦当用の瓦当範で円瓦当を製作するといった暫定的な処置がとられるが、前漢中期を経て、雲紋の円瓦当に瓦当が統一されていく。

このように斉一的な雲紋瓦当が広域に普及する背景には、どのような技術革新があったのであろうか。筆者は、その背景に、関野(1991)や井内(1998)のいう「母範」の出現が関係したのではないかと考える。すなわち、統一前後の秦において、製品の瓦当と凹凸を同じくする母範から実際に瓦当範として使用する子範を複数個製作する技術が開発され、前漢前期にかけて西安地域で普及したのではないだろうか。根拠として、秦雍城内で出土した有紋の土製瓦当範(図3-10~13)は、いずれも生乾きの粘土円盤に直接紋様を彫り込んだものであり、母範が存在していなかったことを示すが、西安東郊に位置し、秦の二世二年(前208)を示す瓦文が出土した刑徒墓地では、壺形の母範の出土が報告されている(始皇陵秦俑坑考古発掘隊1982)ことが挙げられる。母範の紋様は咸陽宮で出土数が多いI種b式であることから(中村2011a)、実際に母範から子範を作成し、子範から瓦



- ・新石器時代（紀元前3千年紀後半）
→土製建築部材の出現
- ・西周前期には屋根に瓦を葺いていた
→西周王朝内の一部地域へ
- ・春秋時代の秦で瓦葺きが発展
→西周瓦の要素+異質な特徴



- ・戦国前期までの秦で瓦に大きな変化
→半瓦当から円瓦当に
→瓦当の施紋に箆を用いるように
- ・半瓦当文化圏と円瓦当文化圏
→東方諸国では半瓦当が広まる
→西から秦の円瓦当が広まる
→中間地域は併用
- ・東周の滅亡
→模骨技法が洛陽から西安周辺へ
→秦の瓦当紋様が雲紋に
- ・六国の滅亡
→各国の瓦工を咸陽宮や始皇帝陵の瓦生産に動員



- ・同一紋様瓦当の量産
→母箆による子箆の生産
→紋様のバリエーションの減少
- ・統一秦による領土拡張
→半瓦当文化圏への円瓦当の浸透
→雲紋瓦当の普及
→造瓦をおこなう地域が拡大
- ・前漢による再統一
→秦の造瓦体制を引き継ぐ
- ・前漢中期までに造瓦体制を刷新
→瓦当紋様の斉一化
→模骨技法の普及
- ・帝国境域での瓦の普及
→地方都市からの技術の伝播
→在土器工人による造瓦
→技術の独自発展も

図8 東アジアにおける瓦の出現と伝播のプロセス

(背景図に Mapbox 及び OpenStreetMap を使用し GeoJson.io で作成した地図をもとに作成)

当を製作したのは戦国後期まで遡ると考えられる。また、京都大学が所蔵し、統一秦頃のものとする土製の瓦当範(京都大学文学部 1963 第 3 部 513 図に掲載のもの)は、「軒丸瓦の範。灰陶質。型押しで作る。」とあり、この記載が正しいとすれば、子範であることを意味している。秦の咸陽宮や始皇帝陵で用いられた瓦当が、母範から作範された子範によって製作されたものであり、さらには地方へも子範が供給されたとすれば、統一帝国出現後の全国的な瓦当紋様の斉一化の背景は、技術面からみても納得がいくものである。戦国各国の出土瓦当に比べ、秦始皇帝陵や前漢長安城で急激に瓦当紋様のバリエーションが減ることの背景は、おそらくそれらの建物に用いた瓦当の範が、母範を共にする複数の子範によって量産されたことによるものと解釈できる。

それでは、母範と子範による瓦当の生産は、統一帝国の範囲全域に及んだのであろうか。これについては、現状では否と考えている。母範による子範の製作は、紋様を同じくする瓦当の大量生産が求められる時にのみ行われたのだろう。井内(1998)は、楽浪郡時代の円瓦当に木範の痕跡があるものの存在を指摘する。また、楽浪土城出土瓦当の一群を観察するとき、紋様構成は同じであるが、明らかに異なる範によって施紋されたものが多いことに気づかされる。造瓦の伝統がない地域で瓦の生産がおこなわれる際、当初は他の地域から瓦工や瓦当紋様の図案(もしくは瓦当範自体)がもたらされたはずである。しかし、実際に造瓦をおこなう工人は、在地の土器工人が大半を占めており、模骨のような大量生産に向けた効率的・先進的な技術がもたらされたとしても、必ずしも定着しないことは、朝鮮半島北部の楽浪土城や、ベトナム中部のチャキウ遺跡での事例でも確認されていることを前述した。瓦当範にしても、木製であるか土製であるかは別として、ひとつひとつの瓦当範を手彫りで作範した例も多いのではないかと推測する。

おわりに

中国の戦国時代以降の遺跡では、時に膨大量の瓦が出土する。特に出土量が多い丸瓦や平瓦の破片に至っては、遺跡を調査し、出土資料を報告する担当者の意欲を必ずしもそそる資料ではないだろう。いっぽう、紋様のある瓦当は雄弁である。饕餮紋や樹木紋、葵紋や雲紋、文字をあしらった瓦当等は、当時の各国が重視した思想や建物の機能を表現したものであり、古来より注目され、収集されてきた。そのため、中国における古瓦研究は、技法的なものに比べ、芸術性や思想性に比重が置かれてきたことは否めない。しかし、瓦の主な目的は屋根を覆う

ことであり、基本的には大量生産品である。どのようにしたら、視覚的に訴え、かつ機能的な瓦を、効率的に生産できるか、ということは瓦工たちの永遠の課題であり、その発展の延長線上に今日の東アジアの瓦葺きが存在していると言える。その瓦工たちの足跡を地道にたどることによって、瓦工たちの活躍した時代・地域の社会や政治情勢をも復元することができるだろう。

過去 20 年ほどで、中国における出土瓦の報告は飛躍的に増加した。これにより、各遺跡における瓦の変遷という縦のつながりが徐々に明らかになってきた。一方で、複数遺跡間、さらに広域における横のつながりの解明は、次第に複雑化・困難化している。統一帝国の中央の瓦と帝国の境域の瓦では、特に技術面で大きなタイムラグや性格差があり、瓦当紋様も、瓦当範の作範の時期や場所、その地域が造瓦開始に至った経緯等を踏まえない安易な比較は危険である。これは、漢代以降の瓦の伝播と普及に関しても言えることであり、例えば朝鮮半島や日本にもたらされた造瓦技術の中には、いわゆる「一本づくり」の軒丸瓦など、中国中原では遙か以前に消滅したが、帝国の周縁部で在地の造瓦技術として残り、それが渡来したと考えられるものも存在する。瓦の出現と拡散を考えるにあたっては、常にその可能性を考えながら考察していく必要がある。こういった意味で、中国と朝鮮半島、日本等をつなぐ東アジアの造瓦史の研究は、今まだ基礎的研究の蓄積が必要な「ことはじめ」の段階にあると考える。

謝 辞

本稿は、2007～2010 年度に日本学術振興会特別研究員(DC)としての研究課題「瓦を中心とした遺物から見る中国領域国家の変容」と、2010 年の財団法人日本科学協会による笹川科学研究助成「漢代における中央と周縁—楽浪土城出土漢代瓦の検討—」、2011 年に公益財団法人高梨学術奨励基金による若手研究助成を受けた「中国秦における瓦の受容と変遷」の研究など、筆者の過去の研究成果の一部を基に、近年の問題意識を反映させた上で執筆したものである。2011 年から現在までにも中国における瓦の報告・研究は日々増加しており、そのすべてを反映したものではないため、近いうちに再検討を要するところもあるだろう。

上記の研究を遂行するにあたり、日本学術振興会特別研究員(DC)の受け入れ研究者であった大貫静夫教授(当時)と、2008 年度に指導の委託で滞在・研究した中国社会科学院考古研究所の白雲翔副所長(当時)、中国の古瓦に関する研究の手ほどきを受けた東京国立博物館

の谷豊信氏には、とりわけ多大なるご指導・ご鞭撻を頂いた。また、中国社会科学院考古研究所の劉振東・張建鋒・何歳利・錢国翔・劉濤・楊勇の各氏をはじめとする中国の研究者には、資料調査の際など、資料や出土遺跡について多くのことをご教示いただいた。ここに感謝の意を記すとともに、未だ当時の研究成果をまとめ終えていないことを謝罪したい。

註

- 1) 陶寺遺跡出土の「瓦」については、耐水・強度などの分析から、瓦とする説(李ほか2007)が存在するが、鄭州商城のものも含め、向井(2012)が指摘するように、それらが屋根に葺かれたかものであるかどうかを、出土状況から検討する必要がある。
- 2) 豆腐村制陶作坊遺跡における瓦の生産は、報告書(陝西省考古研究院2013)では、戦国中期から戦国後期前半とし、張曉磊と田亜岐(2013)は、弧形平瓦と動物紋円瓦当の出現を戦国中期である第2期としており、筆者の考える年代とは差が生じている。報告書の精読・分析を終えていないため、本稿では註として記すにとどめる。
- 3) 図5の東周の半瓦当のうち、2は篋描きで施紋し、瓦当面に釘穴が穿孔されている。瓦当筭によって施紋したものよりも古い可能性があると考えるが、現在のところ層位的な根拠はない。また、同図3の紋様は他の瓦当紋様に比べ線が極めて細く繊細であり、異質である。筭によって施紋された瓦当の中で古手のものではないかと推測している。

引用文献

- 飯島武次 1982「秦都雍城瓦当考」『駒沢史学』第29号、pp. 1-24
- 井内潔 1998「秦漢軒丸瓦の造瓦技法」『井内古文化研究室蔵漢日古瓦図譜』、井内古文化研究室
- 王世昌 2004『陝西古代磚瓦圖典』、三秦出版社
- 大脇潔 2002「西周と春秋の瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、pp. 100-126、真陽社
- 大脇潔 2012「世界の瓦—研究の一里塚」『古代』第129・130合併号、pp. 1-24、早稲田大学考古学会
- 河南省文物考古研究所 2007「鄭州商城宮殿区商代板瓦発掘簡報」『華夏考古』第3期、pp. 31-42
- 河北省文物研究所 1996『燕下都』、文物出版社
- 河北省文物考古研究所 2005『戦国中山国靈寿城—1975～1993年考古発掘報告』、文物出版社
- 京都大学文学部 1963『京都大学文学部博物館考古資料目録』
- 国慶華・田亜岐・畢雅璋 2013「秦雍城豆腐村與馬家莊遺址出土瓦件的建築学模擬実験報告」『秦雍城豆腐村戦国制陶作坊遺址』、科学出版社
- 湖北省博物館 1982 a「楚都紀南城の調査と発掘(上)」『考古学報』第3期、pp. 325-350
- 湖北省博物館 1982 b「楚都紀南城の調査と発掘(下)」『考古学報』第4期、pp. 477-506

- 始皇陵秦俑坑考古発掘隊 1982「秦始皇陵西側趙背戸村秦刑徒墓」『文物』第3期
- 周原考古隊 2002「陝西扶風県雲塘・斉鎮西周建築基址 1999～2000年度発掘簡報」『考古』第9期、pp. 326
- 申雲艷 2006『中国古代瓦当研究』、文物出版社
- 秦始皇陵俑坑考古発掘隊 1983「陝西臨潼魚池遺址調査簡報」『考古与文物』第4期
- 関野雄 1952『半瓦当の研究』岩波書店
- 関野雄 1991「中国歴代の瓦当筭」『古文化談叢』第26集、九州古文化研究会
- 陝西周原考古隊 1979「陝西岐山鳳雛村西周建築基址発掘簡報」『文物』第10期、pp. 27-37
- 陝西省考古研究院 2011「秦雍城豆腐村制陶作坊遺址発掘簡報」『考古与文物』第4期、pp. 3-31
- 陝西省考古研究院・宝鸡市考古研究所・鳳翔県博物館 2013『秦雍城豆腐村戦国制陶作坊遺址』、科学出版社
- 陝西省考古研究所 2004『秦都咸陽考古報告』、陝西省考古研究所田野考古報告第25号、科学出版社
- 陝西省雍城考古隊 1985a「秦都雍城鉛探試掘簡報」、『考古与文物』第2期
- 陝西省雍城考古隊 1985b「鳳翔馬家庄一号建築群遺址発掘簡報」『文物』第2期
- 曹桂岑 1991「淮陽平粮台龍山文化城址出土の陶甌和陶水管」、『華夏考古』第7期、pp. 111-112
- 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号、pp. 334-361
- 谷豊信 1994「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技」『MUSEUM』第519号、pp. 4-29
- 谷豊信 2006「新収品紹介 饗饗文軒丸瓦」『MUSEUM』第603号、pp. 57-67
- 中国科学院考古研究所 1959『洛陽中州路』中国田野考古報告集考古学専刊丁種第4号、科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所山西隊・山西省考古研究所・臨汾市文物局 2005「山西襄汾陶寺城址 2002年発掘報告」『考古学報』第3期、pp. 307-346
- 中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所 2007『漢長安城桂宮 1996—2001年考古発掘報告』、中国田野考古報告集考古学専刊丁種第74号、文物出版社
- 張曉磊・田亜岐 2013「雍城地区秦漢磚瓦分期與制作工藝」『秦雍城豆腐村戦国制陶作坊遺址』、科学出版社
- 坪井清足 1989「瓦の起源の東西比較」『大阪文化財論集』、財団法人大阪文化財センター
- 東亜考古学会 1954『邯鄲—戦国時代趙都城址の發掘』東方考古学叢刊 乙種第7冊、東亜考古学会
- 中村亜希子 2007a「臨淄齊故城出土瓦の検討」『中国考古学』第7号、pp. 97-119、日本中国考古学会
- 中村亜希子 2007b「瓦から見た牧羊城の位置づけ」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』平成16年度～平成18年度科学研究費助成金(基盤研究B)研究成果報告書 研究代表者: 大貫静夫、pp. 225-230
- 中村亜希子 2009「中国山東半島付近に於ける樹木紋瓦当の

- 広がり』『博望』7号、pp. 41-50、東北アジア古文化研究所中
村亜希子 2011a 「雲紋瓦当の変遷と秦漢都城」『中国考古学』
第11号、pp. 35-64、日本中国考古学会
中村亜希子 2011b 「中国秦における瓦の受容と変遷」『高
梨学術奨励基金年報 平成23年度研究成果概要報告』、
pp. 220-227、財団法人高梨学術奨励基金
中村亜希子 2012 「瓦の東方伝播—楽浪瓦の再検討—」『中国考
古学』第12号、pp. 85-108、日本中国考古学会
傅熹年 1981a 「陝西岐山鳳雛西周建築遺址初探—周原西周建築
遺址研究之一」『文物』第1期、pp. 65-74
傅熹年 1981b 「陝西岐山鳳雛西周建築遺址初探—周原西周建築
遺址研究之二」『文物』第3期、pp. 34-45
向井佑介 2012 「中国における瓦の出現と伝播」『古代』第
129・130合併号、pp. 177-214
山形真理子 1998 「林邑国の形成に関する考古学的考察—外
来・在地の両要素から考える—」『東南アジア考古学』第18号、
東南アジア考古学会
羅西章 1987 「周原出土的陶制建築材料」『考古与文物』第2期、
pp. 9-17
李乃勝・何努・毛振偉・王昌燧 2007 「陶寺遺跡出土的板瓦分析」
『考古』第9期、pp. 87-93
劉慶柱 1994 「戦国秦漢瓦当研究」『漢唐與辺疆考古研究』第
1輯、pp. 1-30、科学出版社
劉德彪・呉馨軍 2004 『燕下都瓦当研究』河北大学出版社